安齋叢書　十八

盗量之物歩立聞書

和書門 類
二五〇九一 號
一一三 函
二 架
二八 冊

内閣文庫
和書 類
二五〇九一 號
二八 冊
一五三 函
一六 架

内閣文庫		
番號	和	25091
冊數	28	(18)
函號	153	279

国立公文書館 National Archives of Japan

法量之物皆立圖之義　五巻

法量之部

一大幟之寸幅は皆　六尺弐寸
幟之竿は同三丈八寸千五寸
幟作は長サ三十三枚外ニ二十二枚可ニ五
一旗竿七尺六寸内指ニ尺八寸
立竿五寸五ニ尺六寸
竿ハ一尺ハ二寸
一幟之後ハ幅二尺五寸
伍ニ寸ハ寸　ハ寸ハ寸　五寸　ハ作ハ寸之

法量之物并立間書　上巻

法量之部

一　大的之事　的の勢　五尺弐寸

的ト串トの間　三方　八寸下六寸

的場の遠サ　三十三杖ニ折テ三十二杖ニ可立

一　横串　七尺六寸内　法六尺八寸

立串　土より上六尺六寸

串のふとさ　口二寸

一　的の法小形　二尺六寸

絵　三寸五分　弐寸五分　三寸　口傳有之

蟬の長サ二寸五分
蟬の付様二の黒く白みに掛つけをせみの所白かるへし山形とハ的の張る黒くを云之口傳有

一 明の串長サ一寸法なし半小的を掛るにかしても射る也但
明の長サハ弓杖一杖広サ一杖半之以つまり一杖半之大概小
笠懸に准し之

一 的場の広さの事弓杖五杖（てまへしるの定之）三十三杖にあて以つちより的を立る之的より前への数塚まてハ三十二杖可
成而世ハ三十杖二杖の弓代用ゆるあり

一 数塚の事例式の家庭様前々之へし前後の塚の弓ハ弓杖一杖之
後の数塚を一丈四大寸斗りいつちの方へ（一出之）是ハ右
後の矢代と射手たちいに一尺合ため又ハ斗おまり後の射
手を後に隠さるための但後陽の二段也

一 数塚を置く時前ノ塚の下に石を一ツ置に立之是ハ塚をこ
かしたる時前に立人のて置ためにゆせきと是を云

射法の事

一 射手の出立の事烏帽子ハ風折烏帽子かけハかり衣
ありるへし小袖ハ白かるへし袷を以可着之襟ハ肩を
ぬき又肩を入る時頂之をいらんを着るへし村濃に水色染
之人の家の紋よりて染へし紋ハ家々の紋をぬい付に
染へし次に紋ハくゝり付様ハ右の紋ハ例式の付所よりかさけ
て付へし右の紋をハせぬいのとをり小付之例式のとをし

前ニむけ置之、襟ハ幕摘之、くゝりを結へし、宿を出る出仕
の時女房のたきゝいのけくをたきてうるまなるへし、刀ハさ
やすき席立て作法を被へし、女房の侍馬立ニて作法有へくハ
出立ハ大かた前かたの、此役ハ中間ニ持せたる事をおもて
射る時ニ下ニ出候く、其次ニ弓矢を後ニ出之、当ハ其年 おと
る中間の役トシテ出之、次ニ中間持人出立ハ皆大帷子刀を
さやまき差用し、かけをさすへし、差かし めこおひハなし 十
人の内右刀持ハ白直垂を着るなり、矢丸ハくゝりを結へし
一 ゆかけの事 三度ニの時ハゆかけ三ツ内一ツハ射る時さす之
残二ツハ矢以簡の持ニ下付候者持へし
一 矢の事 三度弓の時ハ 的矢三手一ツ半宛前を一手之

一 箙ハぬりを塗ていかにも上品の矢を一つ持矢箙同前
弓の事 白木例白木ぬりまきなり之 村割是ヲ記ことともなく 三度弓の
時ハ弓六張持へし、皆法ニて一持之、六張し内ニ法ハともそしろく
先陣の左右ニ一持ツ計兆弓の弦の掛様のかり弓の左ニ弦を張
て居すもへし、弓を法時弓外ニ置くへき之、又兆弓弦を代
より出て 法ハ事 弓手の方を成すへし、代りを法ニ掛て達
て前竹ニ法ふへし、弓の持様ハ把りを上の方さ右之肩ニ掛
の上ニ六寸斗を宿すへし、右之手ニて握りの下七八寸さけて人
形持様一持之、たゝし手ハ是も人斗成るへし、法弓二張 是も
たおに有へし、矢丸是を持持様 法を立ニ置くへき之、其外ハ
兆弓 小内 次ニ矢箙持右ニ有へし、是も持様有右之肩ニ置

へし而して矢筒の中板を見たるの所にハ下を前にして板を
つ打置も落さ人能様に巻へし次に蟇皮たるへし蟇皮を
打揺毛をよ爪ろうさ候に真中をおて又横さ候に真中をとつ
て打揺射手の打をとくへし故如係立向て請取て射手を渡せ
ハ刎打揺能之蟇皮の長サ廣サ打人の器量よるへし皮ハ
鹿の革へを能揉て切すへし四ツの角丸くして裏ハ白布之
画りハ志布しふ皮を用立志布しふたてる度有し次に當打ち
く所に右刀打たるへし又後ら二張の又弦を弛ら二張に掛
てて弦を置之是を札を付之札ハ紙を切て付る相役の事の
ために二張の弓の弦に不つ有札をとて人すふ付之又装束
のかし笠ハ係て打板打へし蟇皮の上に置之蟇皮の替

弓に弦を仕合すへし是ハ自然弦除し自然に水の滞りたる時
皮の下にて蟇ためなり是ハ三足之構揺有之

一　矢答蟇皮に出仕し蟇の下る所まて下るして静に向に
出方様の作法の前に射手具足を取係にて射手に出る時
一矢受れの打たる射ちを取係左の手にて巻の上を左右の
手にて巻の上を右もろしとおて射手の弓の弦の上に出のつる
射手の打揺に出ル事へし則射手ハ巻の上に一本斗をとて可打
うし弦のかさりは様に打つく人ハ急度人形能之二本に矢を出す
へし是も中当の打たる矢筒より取係見おて左に寄る所ハ
いた付の布を我か前におしたの手にてハなてきの方を下
て見右し方へ立向ひてて出る時射手右の手よりおつる

手をたより座せ六人ありて候弓の下か笞の方た
へやりて弓に見候小袖を挂して兄矢弟矢とを見合て占
みこさ候へし羽の示むきニハ兄矢之羽の内向ハ弟矢と
云之 扨弓ノ手ニ可納又之矢筈太ニて進元放る左へ元出して
弓の方ニ大指ニて見候て弓附も兄矢弟矢とを見合て鏃
ニさし候 袖の手より下ニ納むへし又今の代ニまいりて
弓の立より出スとおつれて候弓ノ手の大指ニ見候て切み
ニさ候之次ニ弦皮出る事 指手ハ主人のことく指たるを
仕候 立向て弦の手ニ出て候 又射手ニ向て出之射手の
指指ヨリめハ右白毛ハ青之 弦皮をさうけても上ても悪し
膝の様ニなりしかへし 次ニ當をハ中弓出之太刀指ニ候し

きてハおとる中弓の段之前ニも有り射手當をたく附て
中弓の肩をおさへてたくへし 射手具足ハ悪元洞く
候ハ入附中弓の指たる太刀を仕候て一段之
ニ打ち生れす又荒候とも立 射手を指指又ハ上宗て附
附の獅く 射附弦皮をたてておかうして候 一段之指たる候前
ニ引指ニ可お扨皮より前ニ懸ニまいり射手指月の方を合
の足より弓ノ弓か常くまいりへし 扨前候して様ニ桐手
とり合て當とぬく指らを右ノ手て矢ニ元候て弓ノ手候
弓の之へ分さし 挂て左の足より ぬく也し たく附もめ氏
是も弓ノ手より ぬくへし 但弓ノ手とハ元弓ノ手をハ右ニ ぬく
もくて見及び射手の背ニそろハ又右分をと見合て當

ときハ右の手にて代して立く前のごとく右足よりふミく
つろけて前後の折目を揃さ床に踏まハるへし又前後を
えのごとくして一般前後射手同うへし

一 扇并紙取り先右にして手にて扇をぬきおして弓を立
きの立に置くたの手にて扇の要のかたをもて又右の手
にて并紙をも出扇の下に并紙を添て置手に持右
の手にて右の立さの下の前後を引寄てたの手にて

一 扇の骨の方を前後の下に入置し風なと吹へ時の用心
なり治定にかけ候ことく出ときは射候へ次第にするへし

一 数塚へ寄て最中前から八数塚の其後の内かと伏弓を

一 一尺四五寸斗先へおして弓竹を持せかくへし後ハ弓のうら

一 弾を数塚へ一尺斗ときらぬ様に前弓向合て最但今
ハ後の射手の弓のうし弾数塚の様にとくとくらぬ様之
扱きと右の手に目をも見合て立弓をとく置し
弦を仰ぐ事 相手と見合てて弓を立さに置て左右の手
にて弦の端をもてさつとはねて又一指残りからと左右
の手にてさつと弦の端へとれて右に指にて右をハ手に持弓に入れ
添て右の立さにたおつと居掛りて右の弦をハたの手にて
刀の小尻を引まハして膝に押付へし手後居直りて弓を
ハ立さに置て右の弦を手に持引あけて手に弦の端をたの手にて
もち指に懸て三ありに射し肩へと手伝して手をたに添へ
まハし弦をもちて是をも小尻を引出して押付へし 初

左の袖をとられて右の袖を押ゆる時のごとく一度ニ入合て
肱を押ゆる是ハまいくへに限りたる也 又肩を手裁
ゆる袖を手とたの腋ゟ後へまハして さくる手ニ而
たゝぬ事 如りさゆる也 あしハ三度ともハさくるべし 三度ニ
前ニ あてゝすハ手を返して 手前ハ尉す返し本意に叶りたる
時能て納之
次ニ 立居の袖の事 左の袖を 取らハまいくへに 同右の袖
をとられ候きと 押て左の手ニてくるくと三度まハして 袖のとを
りの見られ下に押入て押さへけて扨左の手をぬき出し腋の下
ころ云より右の手ニて 手を腋ニ押へ当り袖をとりて
まり出さぬ之

次ニ小具足の袖の手よりの下に肱押込事之 手前ハ
同前左の手ニて 袖をおさめ入 時も幾度も右の手ニて
ちりをとるべし

一 足ふミ之事 立居の時左の足を始て三足ニ数極へ 始之足より
て右の足を 踏掛て又左の足よりふミ込ろくへし 又左の
足をも ぬき入へし 右の足の乃 我足未払あるべし
後ろの指先も左の足より ふミ始て三足ふみ当て左右
と踏掛ても 入足も左の足より踏 度けて右の足を踏合
諸くへしうしろと横にて 指て当と砂に踏込へし 当と踏
込事 二度目ハ八合の方へ きる 次てらと云る数條左
太の足と三ツ足あるへし 是ハ数條の中ハ 右の足の方へ当て

立弦とハ弓手のかた外かたへむくへきゆへしらをとる事ハ
肩乳とをりのあたるへし中指人差二ツの指にて摘之云
ちからの入形なるへし

一 袖を脱る事 肩ぬきて袖の上のとをりをたてゝ刀の小尻
とりそて伮のことく腰に押込へし 袖の下を八禧のかたち
の前の下に押こむへし 次に矢を左に持事立たるものの本を
弓手へやり春云つれ弦の後に当る様に弓を肉へ出して
弓の本を左の乳さの内かとにあてゝむ祢のとをり六寸計しのけ
て左右を保ためませ右の手を弓より前高くすこしてらの内
かしわく矢をはさむへしと後はんたしして左右の乳ちとめ
さすかくめすゆるくと矢のまへにへし次に前弓ハ兄矢を射て甲矢

乙左のひきうん時後の乙やを八射へし前に又同次に肩ぬきを
入る事御つる袖をくるりし前にかけて腰をたて共に左の
手を先右のふところへ入て左にもちて川せ指に入可し
腰弓を弓手の腰の通りへ弓前に当るときのをく
弓を持も立先へ込しむ袮を川合へ前弓ハ左の足を先へ
乳さ右の足を川合て左へ初て三足に踏切て発すへし
三足に踏切と云と前弓ハ踏まちる乃足の数三足く
乃相に云（あし）かと云大前の足を左のひに三足たるへし
是を後弓より足先と射へし肩ぬきへ入指回前足へ右の足を
先川左の足を川合て又右の足合せしめて三足踏返して
発て相よる又代して前ハ右後ハ左へかゑるへし

一　二度目の事　此度ハうしろへ射始へし　されハ其の射手
よりハ脇さしれ多つ様にて用意　三度目ハ又初の如し
此度又ハ此之射所てハ袋皮に居て其身を見合て級を停有ともたたぬ
一　矢先のるたのまゆてハ平題をかへ　右の手にてハ本たくの下
え六すさけく持て右の方に添へし　右の中指を矢二の中へ
入て持ハ矢も一つに立れならひて見たる所も能くしに矢を射る
本射手の後へ出て持たる弓を出して左のひきを添さて
右のひきとひふく様にして射手の右の膝の上へおくへし　甲矢
乙矢のかはりて出毎度ある
一　相役治るひ手のす弓矢ともに係持て一度出座　前の
中る一人立出へし　当ぬきにて当をぬくへし　打る中る当を出

すへし　扨御前へあかり右のひさをつきて弓をハ左のひさの上
に立て　左の手にて弦をくつろげて矢を右の手に持く
弦に矢を又脇かゝへ置て右の手にて弓の上へ根波を結
ひへし　弓を下よりやりて足ふみの中指をえてひさをつく
次に持ちに乞とし居りて　をまくれて弓に根波のはき
らぬ様に持ちて　ゆるくと礼をすへし　扨ゑるに一つ納め様て弓
持しをす御前に向る弓をつれ扨右へ出りて帰るへし　当
ぬきにて当をとるへし　前後同前根波結付ハ左右の膝
とほうに又ほう付左のひさをつくと云説有之て御的の付を為
是くかす根波共扨本庭に帰り並の射手と持ちそろへ居し
度々是を様のす前々左うしろからせん庭へまいり扨ゑて

枝前ちハくしぐさの中の折目と白毛の方の中の折目とを
左右の手に而て延ちちヨ放して云つきけ夫より中の折目
とおつとりチしうちと先へ折て白毛の向ふ面前に左と右へ
元出す（し折目と左へ為さんため之）後ちハ先も左右の手之
かつとりし手を放て提手にて折目の中を元に一しぐさと
同へ折入てモ作一ト枝前後左と右へめくり合て表となして
根限を枝ちかし退出すへし又云前の射手ハ左の足か踏て
チしかぐさの方をうしろへして前後の射手立向て表皮を表
時のごとく立て又は串も有之時其枝前に云ごとく其
枝の前ハ後後ハ前の其枝の端を串井く

一 御的日記書抜し畢

一番　弓場始射手
名字
名字
二番
名字
名字
三番
名字
名字
年号月日

一　弓のおしたる時の末ハ射る肩を入れて引かゝえて数塚の
あたりにあてゝ長矢を弓と射程法弓のごとく所作を同
ふして射法ハ執弓法聲勢猪程ハ後弓たる弦を返し
て右の肩にあて射の弓の日の傍にあて右のかたに肩
て弓の末を我右の方へやりて返し矢にて出し捧たる弓をハ
出す弓の下より出ほどに後へぬく様にいへし夫金の
袖の下に引そへめて返出すへし此射矢の時弦をおとし
おたる弓を打て下を放す末不残数塚にて法哲
をさして射る本庭に附るへきうち弓の捧程にあつへし
一　弓のかへる時の末も肩を入れて引へし法弓の時
のごとく射るへきたる弓の弟にかけて矢をまはすへきなり

手附ハその侭弓を入れて弓杖ニ侭き肩を入へし弓杖の時も
弘弓のかく為るへし是甚しく打附も同前兄矢にて
おれ〳〵ハ数帳にて法都をとれ兄矢代して弟前て一三寸矢の
時分〳〵ハ前のことくにて打て侭返出して最後て弓代
元前へし但此三ヶ所常禁 禅門ハ外竹をかへ向て打へき
も面白一理之と云々又云長九郎左馬尉御的ニ出て方付け矢
のえしに弓杖の時も外竹を的に向ひ返すの時もそりを外
へ引して打かりしる事近代能け事不覚其ありと此侭可り
打称ハ一理なれ共正理をとらすして先ふりたるいふて
なく〳〵此ゑ人の詞ニ小笠原備前の語之
一 弓元居附の末地ニ落て有ハ足をとりてうらかさすして可

元とら按ひハ肩をも出入して右の肘より手侭て元手
時おりも握かるへくたん若をとくハ肩を入弓をハうちと
元数帳の前ニかかとく長く握をして又立て常数く
て射手弓矢の時為也おとつる程ニをくハ弓代 弟て肩を入
く〳〵手侭一ヶ長
一 胴よりもめとの矢方付し来何たけうりと云之矢をハ称き
す打る数帳の前へ返りて最るへし
一 手巻ぬけて当りけに団子の未称し矢にても手侭可
射とらしうしきらく
一 烏帽子掛居未打る人御的の時数帳ニ最り来り候時
居用しかけ居より手侭立て使り本座ニ帰り用之の

烏帽子かけをかけたり父係の持りとてむ為て用ゆ
ハしゝ肩を紙を垂す立る者あり人何的ニ肩衣紙を
立ほして肩ぬきけり附ん出したりと射二矢ぬき出して右の
足前ニ立て而左ニ帰りける附ニて退出しけるニ射の作法
ニめ式志するハ不当ニ而く出ニ候事ぬ但帰りと押込たしん
ハよかるへきこそ帽ハ又其中ひとつ称されバ後門へ落たれ
こくまじきあとの作法有おしへのあするみえへ有るへきとす
ありと記く

一 一人弓の矢代の事 扣の儀ニ座くかりて不当る一て有し
て附る前後の数係の志中ニ矢为的ニ向て纫を閉下
是ハ前ゟの如く左の足を踏出て三足踏そろへて左の足を
先へ出て右の足を出しかけへし射果て足を引附ても左の足を
引始右と引掛又左より始木の座へ踏切りて座て了後座し
て前の的の称とも一人仕附の矢代為代有へし出前ゟ退へ
度りし了出後弓的ニ向て踏帰るべく

一 三人弓の矢代の了前後ハ前的のとく中ハ壱人弓の
めしと云ふ其外ハ装人も射手前後を矢代中ハ一人弓の
ごとしと云へり

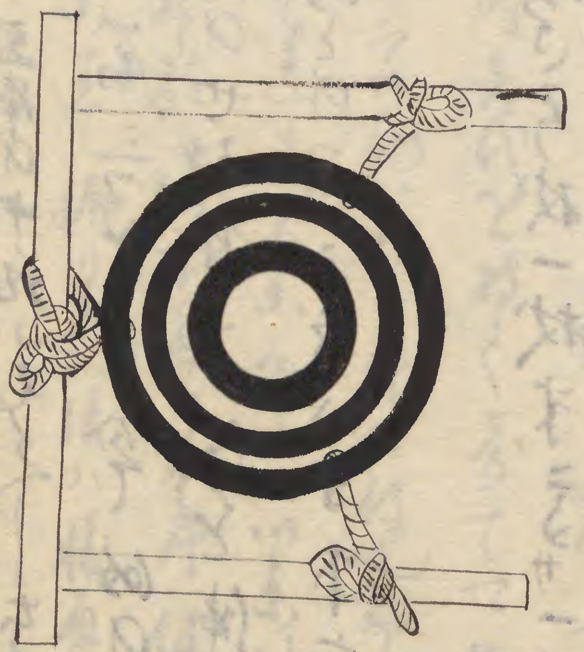
一 立所に四つの角と云説有りて左脇ハ云と不及扣の後
ゟ又二番目の前ゟ三番目の前ゟ是迄の角と云説
の立所あり何も是ニて可心得く

八尺弐寸の的の事
同繪の次第之

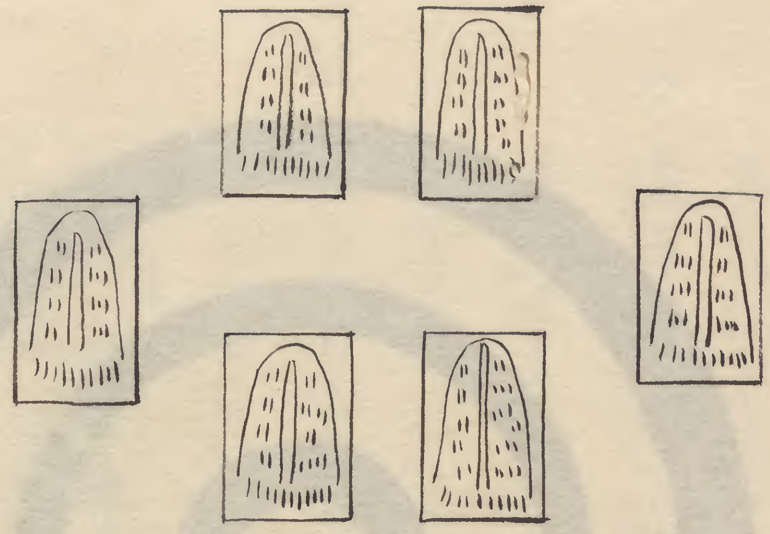
一 八尺二寸の的うすき板
をうしろにあて表裏を
かみくゝりてこのごとく黒く
引く板絵に書之

一 わたけの黒の蝉の長サ二寸
大きさ五分又ハ白くする
黒白と的の白さの様ニ
二寸八黒くして黒さの所ニ
あるへし

一 的の白さの寸ハ五分黒さて
の寸ハ五分の内の白
さの寸も同前なるへし



カツズカナリ



一 的の拵様之事 立串の中程にたゝくへし 长ケ壱丈六寸 又横串の中程に縄一筋 三ツとより合て 的の表の中程にてかゝく結く 扨的のせを付ける 結と縄 三所に結ひ付る也 此串と的との間 三方八寸 下六寸と定 日々へ

一 いつちの廣さら杖一杖 末二三寸 一杖厚サ一杖 半之半
付へし 前に有るなりし

歩立聞書 中巻

圖らし部

一 矢代出様の事 先ゝら左の卯 我矢を持て出ハ 二寸ひらより 銭ら

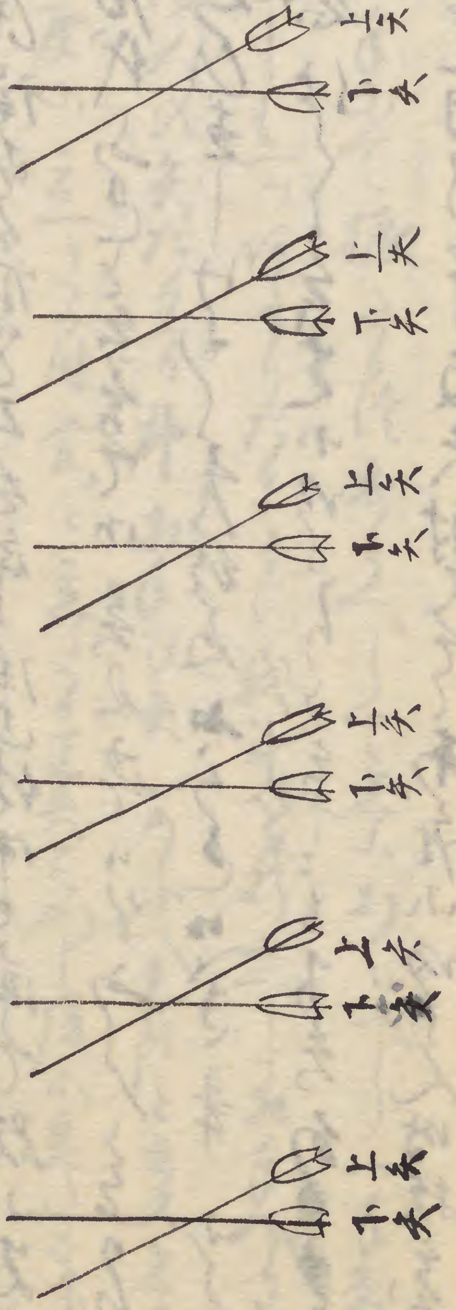
持て出へし ら左の所ら立の中程より ちと前ニ 行とき
とらしろへ向ひ 手をそて ひさを付て 出るへし 手付ほめし
矢代と称し 出る 置て 度右の手にて 請取へし 矢代
悉く 矢持て 行る事し 走りて的をとらへの廣に有る様に
むかひて 見せ申し候 出るし 能して合 又は返し 之 人を
何付も 圖振付 矢代を持し 出て 候ゝ

一 圖振様の事 前々ハら左の卯の後へ ら左の卯に来の時 前
ら左の卯て 振それし ものに ハ 以来ハ 引手ら より つかと
なし 永享二年於 御前 圖ら左の卯 休ませし時ら 和の
矢代等とは 手にて振りし 後ハ 晴負の月 ハ 中り 矢下
振様の時ハ ら 和の中り矢 一振し 元に返る 時ハ 大様 二振

かち二本打ハき後ゟへしハ是ハ無方時の事也

一 掛板の事たゝぬまゝ矢代を能くさしゝと会て二ッイ分て一本と本へ挟くまくさしかへに分て立へしかし中小まと振て又残し残りまたを手に取りつゝ通し人数大的打しハ三本まもかけて振へし

一 掛板の事上矢にても下通し下矢ニても打し高矢共の方に打しハおもりて払をしろくするば後へ払何も時も中之掛て中に立て又立れなり末に掛く為へし掛てしりて一人合之人数小的の時ハ掛ゟとすへし



一 人数小的の時の事是も前分の掛板ハ同方他の小的の時是中そて掛る也へかしにまて度ハ前分挟へ一度小通すへし振る時ハ上矢下矢一度ニ立るもさしきる

私云又二ツにもけし振る時ハ七本八本打出しに上矢下矢一度に立る事未定之二度出候前図的に見え候へめの

一 一度に立候の振子の事物云又請取への時ハ振への事ハ

同前若ハ右手ともに持かゝりてハたとひ後に当ても
上矢の射手にて振ニ在ハ上矢下矢一度ニ立ニまりて之　所ヲ
ありしか後に当る正長二年ニ　竹前伴国方に立ち八
老翁源六下矢屋代　源四郎ニて　後に立と有しに屋代
兄矢を射あと老翁寺矢を射ゆて未り待ゆ成　それハ初
めの所ゝ矢ふかた屋代　それと云屋代云老翁ゆましと云
此論にゝ京と乃右京　陶山備中を用て段に先中ゝる
屋代ゆましと云落て此見て上かり人と云われハ陶山
兄ひ申しけれハ老翁及知らましぬへき事　かくハ矢
念仕らぬ光にゆれぬと云へとも下矢前ゆ立落てし

一　通羽打事　立矢射てハ前先に持ゆ人時持立ゆゝ　右

此事ニて振ゆ候まかゝへしてと云かしへし一の矢ゆかりと
云しもいツゆとりたるらし我弓とありへしれの方ゆうと云し
他人の矢たりか神ねの矢いちようへと云又上矢下矢
一度に立ゝる時前ニ立ゝる上矢たゝ後に立ゝる下矢当
是ゆしハさし落て上矢をハかゝりかねにに下矢を取てれ
之へして取し落そてるゆゝへて当へし上矢の上に当まて
へ下す　又或いうニ上矢射当て返矢の時返す之　相の或ハ
筈当或ハ若当にてハ通羽の時も我矢とハ上に本のたゝ
としてまりく立へし　下矢モ人たちハ前矢代とうとき
事ニてさ前の方とゆへて当へし　羽又筈当ゆゝとい
ふともみ外人ゆとゆゝハ此代ゆゝへ当てれの方へ用とさん合へし

一 立所おそ弛きをとらへいる事と云けいきして礼をなし又
一日矢返す日前二前一日の時よこさ両方して出る事にて
立居の事 先立矢にて立たる前ハ園ひかすへし大前ハ先へ
進むなり 前残ハひかす事にて入ひかす八大前を大後とハ何式前
後の矢代をまつへし 中ハ皆〻扣る又立る立の中の立居にて
一 出立矢下矢ハ一度に立所ハ上矢一双と園ひかす小足て下矢又
後に一双に立とる又 出立矢下矢一度に立所一本なり究る事
かり御前御園ひかすに能かりし之
一 役の調詰の事 前後の躰有て必居調ふ出て大前の一立下
よりむて立候て 延気の人調をとり御して立るなりて各一立ハ
一 弦切の事 見矢出て切ハ打る肩を入足をひして一度能ほと有り

射手見矢を射て肩を入て見代すへし 数持るを上に置て
ハるかにて 兀返おして法智をむて打る小見代して 可立
乙矢にて切ハ居のまゝ置て 返前の時を居ハむて 下段
大後かへハ大前おそたる弓手矢射く置て見代すへし
式ハ見矢に 弦切ハ法智にて出弓矢を射る本座に入る
人時さ元の切法をるとりそへく 返おし之
一 弓打ち返の事 大略同前 矢の方持候様にて一派想て
園の前ハ大後射て人々ハ皆立座にて 永享二年
御園にて居戸に上矢出て法而ひかと矢ひらきてをやかかりん
矢代をは返して本座に帰りたりひる下矢を持て湯山彼中に
射面勝貞かりとて 料足をとらんとしける時たけ田

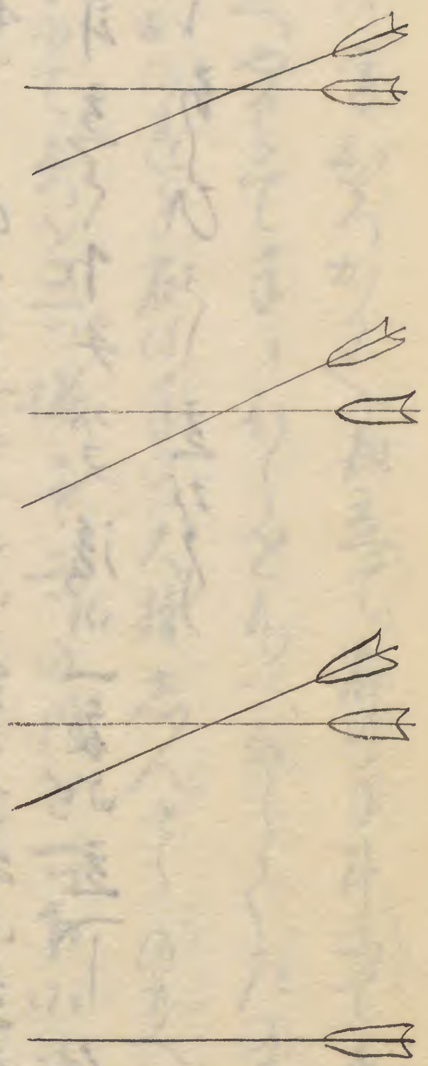
小笠原申けるハ 何ぞ事ハ二元よりおこりにて 此事を申けれ
ハ何ぞハそれ〳〵がなかりにてよし申けるが清さしく
廣戸殿の何事と見へ候と申けるが近ごろ矢代言はし
日本武にてありけしが高庄にて廣戸殿に一所
一 にてなか〳〵に成りける 廣戸殿と此沙汰の何りける事
かゝく知とんぬて居ならひたる長九尺有余厨ニ中りたる竹事
矢念をりなほ云矢先と云も何とやらんなるほど矢にて
思ひて矢代とば通さぬよし と云ふ通しけるにてハ云
定めたりけるにあんのことく取りてなるうち矢をそ存
て通さぬよし申ふうりけれがさかりんにハとて陶山かちに
なりきりと云 後の沙汰にも高庄にても廣戸神妙に

中たり矢先と云も何まり此無之 大事の返事を高庄
にて然の通 たりと沙汰有りと 及承事
一 同氏作弓のかけの事 大文字云 よりにてくるし
おしりかなりかけて用之て置之 二矢目矢の勝負先入ハ同之
一 矢代振時持様ハ事前に持く 好まハとて何なるうち矢代を
又何かなれた家でる 後に持くかる之 矢先と左へ
あんばい之 同図書矢不割禁 多条記之
一 弓の内矢代 かゝへき様ハ皆人矢代 見んとるとより
はつめて的中の方に向きて なとハ西むけ 置て右の手を
前におきて 左の方と下におき神以の手を渡ることへて脇に
右の方へ 左へ一揆ち 神ちまハすへ 左様に仕ハ右の方神

次の方へむかふて 扨立て 右の手斗ニて 矢をとりてうし
ろへやりて手の内しどけへおしくだり手斗ニて矢をとれ
りおのれと右の手の大指さしんとしの方へ起へし扨右の
手ニて矢を二ツ振 又二ツの門を一ツ下ニ 神次の方を出
ル的の方へおしてかに出て 今一ツの矢を下ろす矢のおさへ
さより出す斗うつい出て 矢を立て出之上ろの矢ハ神次の方
六寸斗 わるく 弓きりを下ろの矢ニのりこすまゝ出ちりへ
て振ありまちうへとも又ぶつの出家ハ目しを直り之一位ツヽ振
うちニも後ニハ此方ニ的の方へ出させとして的ある揃文始り
出ちょ時ハ初ふりおさゆるたる方より上矢下矢一位 後ていこ
出て 一番のごとくに 御座振とも 法きるろく 神ちまゝ

してかゝる之 又的前にかゝらんとき 西の方に居直て矢代ニ
ありに立所ハ一歩又始りたる方より右にても一振本より
様へ足してねちあとかふハ王矢より出るへし一ツみつて
かるうちにおゐても上ニ出矢ハ一歩に立之矢代ある
祓立矢をとおして弓たをしをさゝへ弓のゝしてたり
かゝる故祓にかゝる出して一振矢代ハいりとも出れさとく
目振へしまちうへて上ニ出ハ一歩に立矢之大塚あるハ上
矢斗立べく下矢ハ又後に一歩に立へし 人左くあるくハ一位
し かふひろく立なり

下ニ有る矢ハ上矢を持するなりいさ本たれより六寸斗
離して上矢を離之上矢ヲ下矢ニ乗せて置るハ神殿の方へ
六寸斗り持たるべし



此矢ハおちの時之
行手より右の時ハ如此
かうくおくへし

さいたいの串　大進内の時の串を用　又次郎宗信ニ為
申さるる時宗信より相伝の分也　串の長サ壱尺八寸也
串ニハ本を先くけつる也　紙を三ツニ切て中の紙ハ串ニ不
はさむ也さかりハ両方へ紙たけひとつ余りてたるべくなる也　三ツ

かさるときハ両方とさかり数六ツ持るへし本ハ白き紙ニ
たたみきをせめを入へし紙祓りて後ハ二尺まはして
串の先へ在る上ニくむすびふたり同的なとの時ハ紙六ツ重
重て切也へハさかりハ数十枚持るへし是も不苦と云

弓立聞書　下巻

稽古之部

一 就稽古禁事有り仍記之
第一 弓のかたきなるにて不可射
第二 稽古ニ肘勝在不て射
第三 酒ニ酔て ふつ射

第四かつ屋ある時不て射
第五丸くさある時不可射
第六乱んうすして不可射
第七すくゑ少て不可射
第八弓射時たまりもまへうしん
第九槌をうつ居うしん
第十嫁車不て抱

一 弓の力の事 稽古の時ハ不持ニ気着弓の力竹合程成りべし
そを屋ハいとけあきに気竹合能弁しんたる矢麻を射まさん
時ハ弓ニかへりて竹合にて八射へし惜のまさき事扇成りべし
手段射大概なる時ハ弓矢所昨のまさて一定て付ある弓の力お

あく屋しの中しふにはへふ射術よへし百の麻ハ弓の
法りおこる為りいふからを我近近ふ法会へし能も
太木ニ度なとのすきこつきたるとくたかふへし大木ハ我
力ろハ度ありくしかつてそるハ法くも法たしやいあゝへきふ
やくもまち〳〵ハ法わきさるを好ふまりて弓こうかひ本意
とまふ之かたるけまを我身ハ度ろハ大木のことし時此法
残ちらくる弓の力をとかへ〳〵し是を背ハ本る事有も
いふ法をる事なるへし

一 地形し事 凡弓の地盤成るまの凡先か烏帽子の凧口
ふおと法よく調るとは地形の法射とするまえ手調るよ
何のまきことに八日街中の本之全る偏みまく地を

弦よく端にハ引しは何となく矢のまへより打上りおろし矢
を放つ例にまかせて大躰引しやりよしたさるを大隠我
態と云之鞭中漆を足へ漆とも形也法なると云を謂なり
へきより先室にて弱し事之こ云ハ漆を引ハ弦漆をハ引
まつかひに二びを為くる之さるゝ引ハ矢なる形を弦より出し
て志らもさつし手引しく此光明よハうるべしと云但是ハ
弓の流にしまるへき兆能く心得べき事也之

一 矢のまへとるいうより矢の通りを的に向く様とさ落しと
かれへ返し弓のうしぬしるぬ也ハ肩のかへしにくき成
矢のまへ前に寄るぬ也ハ打上にあるる之弦をに構てきつと
的を能見て祢こましき落に見て手前指を遠く打上げ

額指中もすまじハなくつる之口揃かつき事成りいへるにも言
をかりと云ハ此落之形にて的を見おとがひを肩の方へなすべし
セよと云るり秘事あり但人の好ミしくハ不及云 且又武辨
の弓の統にもよるへき處也を好所に引たる

一 打上の事ハ打上ハかつりの立つることごとく川あろしハ大鳥
の羽をひろげて打りることしと云の何にも能打上をす
好但矢構にありて如ク打上ることなる事引り矢構に寄りて
々ほかりて弾弦ぐくするくと打上てく山ハしくと川己け
へしおらまへて弦でゝると言事とげて川て打上ろる下ふて
有との弦のなにハるるなし川ぬ也ハ上りそゆるす事も
有因よく此意をなる事く如此又行打上の矢構ぞなし

とゆるく矢先を土に指とうとみへとも弦に弦かくもつるゝを
口伝なる事なり弓法の事識に心かけ候ハ遠矢（ことまこ）次弦の
ことなり又の弦の秘にある（ことなり）義を射手ハことなきハおりもらし弓
たけて八節ある事也 殊入身取ハ弦の事なり人ハ何ぞ
あつをし 烏帽子あまさるなることもこなく（是也）ナシ弓
て弦上るまで弓しもかゝしたるハ弓の本とる也 ちうくして弦
上へし弦かゝる時弓の本たるゝ母八胸以まえきことにいまゝなり
ゆるくと帰不なく弦上て引おろすへきこ 押手の前の身ハいつ
にも引し様と引下也 或ハ前の肩身と前手を引おろし
て肩と引様く肉もあ式ハ矢捻を引たとして 肩にて矢て
射るいのあとも有めあこも ある様と不当（ことなり） 冠弦ありけ業

一 さて用し弦付をもう弓にて あくハあしく〜
ゆえへ事 ひろくと云ハ人身を調ひ矢をせを嗜事（ことなり）
然に人身と云ハ弓弦そ弓をいふも振り二の腕に力を入
る事ハ何も弓ちに力を入院をひを八積に付てさけて打
ある気をも調くそと放セ弓ちの事也たちろう手十分矢放
るゝを人身の肝要とゝて矢不文此外とりへりにめけの理
とふ覚して弓弦にゆえへハ射手ハゆえへたる秘ハ弓ちの力にて
れをうつかすと云へとも夜に 放ねとハいつくも乱して又調る
事為し剣 無益なる二手も成りことくる云えへと云す法
の用をけく 放ねとハおのつから人身調へ節も たち済く
事なく此のあるを知 ゆえへと云（ことなり）然丈夫 弓法の身の行要の

かにも弦への當りハ見苦敷なり得さるの前にても弦への
不足何とやらん何いきりにて不足なる儀を稽古してきたし
行きらふめぐる射手なれた能方にて弦へぬれハ物しく
見所行り能して可為事之 何ふしも工夫肝要なるへし

一 看的の事 九矢所ハ遠とも近とも手行てさゝるよし 先れ上る
見れともせしやて的を剣川付くハ甲やしの上弦の内弓の外
かとより的を見へし 夜矢所ハ後の下なるへし又それを
ハなつして後の下二寸さけく小さ下り上二寸か入てて放ゆ
亦を察して二目つかひ出来る者は修行之 握りの上とてる
弓の内 外かうし 弦も 月の小押あて 放時見計るなる
を一文此源付ぬけハならさりかぬる事之 一弦切

一 能引てくひたる上矢所討の外遠の事 是ハ押手弱きの
力ある人ハさる附の此なりいかにもよくふかくめて 放時ハ又
小ふつて遠 但其何ふ強くふ詰めさりたるなし 行たれハ多
詰り申く 矢所下遠要細中かる詰ふよりて あしく是
を記く 握て手の口傳弓手を詰様く 前手肩 ぬれバ
前矢と少く弓の本付れハ前矢弓の上 又是ハ後矢 此道
右後の矢所之 但何にも其射法付たる法第たる射手ハ否
別身の内ちよれハ前矢ふ引之 詰めたらされハ矢さがる法
つめても放行ふけれハ矢後之 是ふて大概下る也 其ふハ
十せども其実世道てよつて矢所遠するを不知ハ横的を
射て此義を業して見ふ稽も 不遠 読ふかけたる ぬく

にて見えされハ古人も夜的を秘しけるハ此ゆへ之事成白ハ
射へからす夜前にてハ百夜も夜射る事いはれ事
なるへし此矢理をよくかけて射ん人ハ必仍得あるへし秘ます

一 三巻の中より引矢所見るへしおほりつき有なり

一 二の目に此事此心もハ矢所を不審まゝんと云よりおこ
ちた之事不審ゆてくひて事行へきたゆへに矢所を云じ
て西理をよくとらへんハ此膚目へし 矢所ハ月影にしく

一 我も我も何附するへき故之 されとも又二ノ所を云ちハかけへしも
もゆるくても的と矢所と見合へきにゆへに此式ハ又我らにもやより
思ふと見ゆるんの仏行けりのか拍に邪法に入ぬ事ある法用なる有へし

一 押手を拵えさる射手の事 如此押手弓手見る仍往と云末

地盤弓を進退し見さる所によりて之見しも誠の世出
来る之 稽古の時ハ強弓にて拵え成して参たる手段よく
射るよふ候ハ此見所なく定る様かための事之 進退 稽古
るにて手きゝものを見いるにも射へしかく稽古成就として
をきて下射弟又手所をも本の通又素ハ引おほ候時ハも
おもして見よ 引おらす附押手ハ左へて後におさるへくもれ

一 弱手不見え射手の事 見とゆるかたと不下帳よくつくん
にしてハ不及云 仮弱手ハ不見え頓にても つよくて力を
強いりぬれハ又甚遠ふ下るにも弱手浮ばとへとも
腕にして押ふへんハ無其甲斐なくして利身一の禁
なるへし 数乱し矢坂遠矢多くもとらくなるへし

一 かけす射はし事 是ハ矢束を引せこしきかおこり有事
一しきに調さる射ハ此辞と射る之 云ハ先推 見ぬれハ
弓手にカふ入して後ハ又放の的拍子揃ふへからさる流前の
力斗有る弓静に放す事ふ可叶きふに依て放さんとすれ
あそかれ成始てよる程に前はしちろく之 是をも有と
云次も様この大事たる 肝要ハ種々此事也 一しきに見え調る
有て自然と空見放神変不思議の倍能成すして変ことし
きおもてかけすと云事是ハ此の所く此事成一しきによく
不調して我 放を抜射ハ此辞を射る之 能々工夫
あるへき事也

一 放し事 放事ハ弓のかんなん 織放と延るかとハ只此放の

藝之法の秘曲も放をもるとせり是に依て矢も飛不飛も
不て遠の成自然の位有文 占所に難定 浅猿きたら
の為学可成初心成大概記有しき様いうとなれハ有事も
越し無弓手にて住門より矢抜の程いまんや入ためて放不
所出弓手の力肝要たるへし とかく矢先の弓手は弓成入能
活てそと下放の成そと放と云様々の秘曲有能工夫有へし
やすもたとて進之ハ放あしくして矢も越へ矢先もまろきことなう
も人目さハかしくなるといふにもさふまける矢成たる能射
揃へてる射ハ此 射るハ矢もおふれ矢不も遠へからん是
所放の辞にして的拍子の調不ふて空見放不ある上巻
小め中にも振へし巻のさけも 持様も弓手にて斗なし

筈目の気にまさて一段猶成事へからん

一 大放の事 覚ハ筈目力ニ入レして腕先ニ力入る気ニ係て弓手ハちこにふしのそくに弓れ力懐に随て放手引之返て筈目に力成入て詰てさつと 放さハ大放ト成へからん

一 小放の事 覚ハ操の前成事しと云ハ工夫に覚に依て出ぬしして放と斗覚ゆて甚に放にある之 弐ハ其の内をこするは云事ハ操の前之 当せハ左程ハ不放ると云る内て小放に成事も當か程の邪路いつしにても一大事之 求ても不求得ても不得之

一 弱参の事 請て此癖ハ弓成我と進退し始まる所より弱来より 殊に弱参ハ弓の力すき又ハ正理を不知してある之

を正理を不知と云 二の腕に力成に入レして弓を排出りめ人とする 様に覚にかし為て放する弓の力去参のきさうかひるきものう覚を來す へき様ハ弓れ力成落し我進退執うるへき礼の弓にて 可射ホより録して押手前ノ体て弓成いらにも後参せて二の腕に力成入て筈目をつめて安方志かしかこめ打ともうちろうぬ様に神を入て放てこそ必ず此癖あるへし この腕に力不入に依て弱参にある近 二の腕に力成入事我カかゑてるてハ能る不可成 射様具まり来て様るとて云ハ此外の弓筋をて来りまう人ハ正理を知へからん さうゑう能く可有廻慮之

一 前押こつきの事 覚も大方ハ前押他 此三の癖ハ其の内

ぬきさる事に依て 右手をうち引手の内得すと云ハ弓の弱柄に
依てとふかくに切る事ハ弓の張に依てくいこみも家ミ矢す
弱社の弓にて 弓のくさけもと握て弓手をつめ二の腕を
さし出す方にカの入おのせそふそて両拳へ放時手の内をくり
うくへし 此ハ拍子文に 放の弓をさし 此拍子揃ぬれハ引尽
に弓の内より返るる 此時文に こつきにもせつ斧押も立
へ力くれ三ツの離にかゝらすしてあそらひ能されハ
のつまりに 神変なりいつくにても只此分なるへし
一 遠放の事 是ハ二の低きの一にハ未放に送り二にハ放まして後
おくり付も秘ける内弓の張に依て右手離之上一ツにハ放ル
して送ハ弓の力つよきに依て身の内よりく成ておのつから

放の分拍子遠て送之 是ハ放始ふよりおこり之 是よ放
て後送ハ弓我力に応さる成弓をもて押うて引と斗成
る是ハさるへ弓の力にも 我力一ツもなしと云 依て弓
にかゝりひ分拍子そろひさるに 放る弓にかゝりつる程まて
弓の力をそへてうぬ程は迄見 我放ぬれハ弓の押作る力か
そとある程て而て 送放に成之 是も出及へき程ハ只め斧但此
離ハ残に身の内弱射に出る也へしいふにも弓のよろつて世の
の弓気成ともそろへて身をそろつて持つりと放ぬるハ尤
小此離 不用れ聊相
一 弓倒の事 立てる前の弓に つ弁つるしと弓れ 弾まて
弦の入てつ弁弓のを成をとめて統を斗を八脛胸にこへて

まるにゝ引さ成ゆへ身傾て右とろりかけて右ハ见苦き
くせ二の中指一つ之弓持る時の肩のかゝりなりんハ勝在
なるへき形り又稽古の始ニ弓倒ゆへかゝる。

一 弓夜度射手の事此癖ハ手の内まろきニ依て度なり
手の内とゝ川ろきると仏始て弓成引ろゝる事大悪之
いふも必ず成ゝ何診しまし八弐ハ弓成之度し弐ハ弱て
後弓れ弓そる事も何も甲斐なく見苦形り

一 引のく射手の腰ぬく射手の事是皆弓れつまれたまゝ
肩成まゝる射手も同事なり勝退り退なるまゝそ射也
へし是ホの癖ハきち鍛くせかまる代の分か出るゝ人きニ
あかん弱ら小そ是成ある所成くせニ射なせハ不消也

へかしれ

一 放形ニ射手の事左右の仏押かと氣と放るまゝ不まゝ之
腋汐より落こり是ハ勿论格違てなたきうゝ引かゝ手ニ
力を入なると云て一と念の調さるより出来癖之内も稽古
此時無理ニいしし神氏入過るる射手の出成事也所作弓
手高身と所持ち足の流ま先退ニ手先調ま手なき人ハ
無き足の癖下出来也

一 明根の弱き射手の此事凡射のかん志ん之押手前手のかけ
合いりと云え身の内よりくハいさつ事成下しさる事此
まとかしさてうつくしく射そろへハる射手なれハ何と申ゝん
内弱甲斐なく之へ弐ハ射の形と引成し なとんてるまそ

胴の弱き射手あり前に記す係りて働きも悪しも皆一家の
不足之所にして働のかくのあてゆひと調ふ云たか本した
身の内よくきく事ハ何の所ぞと云ふに肝要ハ心のそぐり様之
其後書置のいろ覚悟造立さるにも一分ハ其をとらへて
極め是等と立へともかくとも所ハ一ツのくさひにて定るへ
そのいくつきのとくより左右の肩桁月日の内腰腕足の爪先
に至るまで各々念之の工夫といへともかくとも所の弟一寺八ツの
心之其くさびに喩之大きく心成ておくと云事ハされも皆
極ると立へとも其の肝要と志して強く人称之移して此心
事に多くの大事これあるへき之　働工夫有へし　一

一　引のりはる射手の筆其ハ文心の所ぞ之右いくとなれバハ
前にハ心のまゝにようて又騎慈く弱此さんハいきの
なり程度敵に係て此殊の外に引のこ然る心をあるかち
にならへき事にハあらん矢の法を向へて打ちとする時弓も巨る
自に色成かけく的成也度こうるより其所へ神成へ
時心をとらふ云事定之其後ハ更に無心なき所別心の
調る所にし此時ハ不求不同に自然に調る所成肝要と存
へきるり成志にして心をとらると云いふにも気をとらり
心を溶め身九内法る可しと云ひて射手の以手に心のそこに
落ひて成のり気あれ之かり様に差別に教に差しして
何とく不可叶なく

一　機九条との敵をとらて悪く此段に射るすへ云ともその

威徳にしてハさらくハ人形を作らハ他人に似ることいへとも
其実ある事ハなし然材を以て是をつくるの也とそといふハ負
実の方を的に徒せさる材のむ形也是を喩に一切有情教に
入るゝかすといへとも本有の性を得させさることく
此一大事も全不可思議除よりも強て是は在ハいのちこ
其根本を明さるゝ也方に種々の教道を設て数十の戒を
なすといへとも稽古の功を積さる者ハ其位に至りかたし唯
道教に於祖を説を在所にして稽古を不用者より起こ
此理を可明是を以て神通力の隊に至ることなし全其の
強力にあらすしてさい業の理を明さるにより偏に神通を遂し
妙を発する也世人及ひ世人精儀分るといへとも是矢の徒用

尚修に不可遠いふにも気を励し此理をあきらめハ虚空に
計を立るとも大遠遊く成り語不し的も帰さる事可
至難し誠に是不思議一ツ松凡稽古の安理ハ深より深に入
種々の大事可有根る所を深に所用分の新様戯論の
深に云まを大事の形得也深に学て上事に大障に成る
但ハ此理をよこすに似たりといへとも全不朝暮見我等て
と明め自身難儀する所の事多し記書て見て数々
数々なる事書もらし文云初心の人此事を見ハ或ハ依てと不
信或ハ入れ能そ相ゆ相に迷て耐候る事不可為
時に候事知るへき能又可得者也

應永二十七年三月十六日　備前守　持長判

永正二年九月二日　右京大夫　澄元判

大舘六郎殿

大日本帝國圖書印

国立公文書館
National Archives of Japan